

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：32664

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16836

研究課題名(和文) 上古中国語における否定詞体系の通時的研究 出土文字資料を中心に

研究課題名(英文) A Diachronic Study of Negative Systems in Old Chinese

研究代表者

戸内 俊介 (Tonouchi, Shunsuke)

二松學舎大學・文学部・准教授

研究者番号：70713048

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では上古中国語の否定詞を音節頭子音により\*p-type否定詞(不、弗)と\*m-type否定詞(毋、勿、無)に分けた上で、殷代甲骨文、西周金文、戦国時代から前漢までの竹簡などの出土資料と伝世文献を併用しつつ、主に\*p-typeの「弗」と「不」の機能的対立が、殷代から前漢までどのように変化したのかについて検討を行なった。

さらに本研究では秦漢代に「不」が「弗」の発音を伴うようになる過程について考察を試み、また新出の前漢の竹簡と木牘を調査し、「毋」字が動詞「無」を表記するようになるという現象についても解釈を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、殷代と春秋戦国時代の否定詞体系には大きな違いがあること、さらに言語の発展という観点からみれば、春秋戦国時代の体系が甲骨文の体系に先行する可能性があることがわかってきたが、このことは両言語は単線的な関係(同一言語の祖先と子孫の関係)にあるのではなく、春秋戦国時代の言語の祖先と殷代言語は異なる方言関係にあるということを示唆する。両言語の方言関係や伝播過程をより具体的に実証するには、今後は西周金文へ検討が欠かせないことがわかった。

本研究の成果は上古中国語の通時的研究や方言研究のみならず、さらに射程を広げ、シナ=チベット諸語の歴史的或いは言語類型地理的研究にも貢献しうるものである。

研究成果の概要(英文)： This study divided Old Chinese negatives into \*p-type negatives (不, 弗) and \*m-type negatives (毋, 勿, 無) and examined how the functional opposition between the \*p-type negatives 弗 and 不 changed from the Shang period to the Western Han period by analyzing various excavated documents, such as oracle bone inscriptions from the Shang Dynasty, bronze inscriptions from the Zhou Dynasty, bamboo slips from the Warring States period to the Western Han period, and also handed-down documents from the Zhou Dynasty to the Western Han period.

Furthermore, this study also examined how 不 came to have the pronunciation of 弗 from the Qin period to the Western Han period, and examined new Western Han bamboo slips and wooden tablets to better understand the contested use of the character 毋 to render the verb 無 during the Western Han period.

研究分野：言語学

キーワード：上古中国語 否定詞 甲骨文 金文 出土資料 不/弗 毋/勿/無 非対格動詞(unaccusative verb)

## 1. 研究開始当初の背景

戸内はこれまで、上古中国語の言語システムの解明を目指し、出土資料を主たる材料として、文字及び文法の研究を進めてきた。例えば、科学研究費助成事業研究活動スタート支援(課題番号: 2384063、代表: 戸内俊介)の研究助成を受け、「上古中国語に見える文法化・意味変化の諸相—出土文字資料を中心に—」という題目のもと上古中国語の文法化現象について研究を進め、その成果を「上古中国語文法化研究序説」というタイトルのもと、博士論文として提出した(提出機関: 東京大学、2016年3月)。博士論文執筆の途上、上古中国語における言語現象が通時的にどう移り変わっていったのか、また殷代甲骨文、西周金文を経て春秋戦国時代に至るまでの文献の各々が反映するところの言語がどのような関係にあるのかについて、今なお不明な点が多いことを痛感した。そこで博士論文執筆後は、各時代の資料が反映する言語を比較・検討し、その間の言語の差と、そのような差がもたらされる要因について研究を遂行したいと考えに至った。この種の研究には、言語が記された文献の成立時期を特定しやすい出土文字資料を用いるのが不可欠である。

そもそも、上古中国語を研究する際に、伝世文献に頼るだけで十分だったのは既に過去の話である。今や多くの出土資料が発見されていることから、そこに見える文字に対する研究を行い、その文字学的知識を最大限生かして出土資料を読み解かなければ、より精密な文法研究を進めることはできない。しかし出土資料研究が従来、歴史考古学者によって担われていたこともあり、中国語学研究者の中で資料の扱いや文字の解読に長じた者が極めて少ないのが現状である。従って出土資料を純粋に言語資料として扱った研究を進めている研究者も戸内を含め数えるほどしかない。無論、我が国にも古くは加藤常賢や白川静など文字学の大家と言える研究者はいたが、近年、郭店楚簡(荊門市博物館編《郭店楚墓竹簡》, 文物出版社, 1998年)、上博楚簡(馬承源主編《上海博物館藏戰國楚竹書》(一) - (九), 上海古籍出版社, 2001年 - 2012年)、清華簡(李學勤主編《清華大學所藏戰國竹簡》(壹) - (玖), 中西書局, 2010年 - 2019年)等重要発見が相次ぎ、研究の状況は大きく様変わりしたため、過去の文字研究は大きく見直さざるを得なくなった。

戸内は上記の問題点に鑑み、数年来、出土資料を中心とした文法研究を遂行している。従来の伝世文献資料のみを用いた上古中国語研究の問題点は、当該文献の成立自体に議論があることも多く、所与の言語がどの時代のどの地域に属するものか、判定が難しかったところにあった。しかし、出土資料はその出土地点・年代が限定されており、それゆえ資料が反映するところの言語の時空間を特定しやすい。これにより文献資料による文法研究の弱点は一定程度解消され、時代層を意識した通時的研究や、各地域を比較した方言研究が可能となった。このような背景のもと、本プロジェクトで戸内は「上古中国語における否定詞体系の通時的研究—出土文字資料を中心に—」というテーマを設定し、上古における各時代の個々の否定詞がどのような原理で使い分けられているのか、またそれらは形態論的にどのような関係にあるのか、その使い分けは時代と共にどのように変化していくのか、などを検討することを計画した。

特に本研究が計画段階で重点的に検証することを想定したのは、殷代甲骨文、西周金文、春秋戦国時代、秦漢時代の文献のそれぞれが反映するところの言語の差についてである。否定詞からだけでも、各時代の言語が単線で結べるものでないこと(すなわち殷代言語が春秋戦国時代の言語の直接の先祖では必ずしもないこと)がすぐに見出せる。事実、殷周時代と春秋戦国時代の「不」と「弗」の機能に大きな隔たりがあることは、夙に指摘されている。ひとまず、否定詞体系という、どの言語も持ちうる言語現象を対象に、殷から春秋戦国までの中国語の差異について考察を試みる次第である。

## 2. 研究の目的

本研究が研究対象とする上古中国語の否定詞について、現在まで最も影響力があった研究は丁聲樹 釋否定詞弗不(《慶祝蔡元培先生六十五歲論文集》下冊、國立中央研究院歷史語言研究所、1935年)である。丁氏はここで初めて、「弗」は多くが目的語を伴わない他動詞や介詞を否定するのに用いられることから、それ自体、目的語代名詞「之」を含む否定詞で、意味上「不之」に相当するという新説を提示した。続いて、Boodberg, Peter A. Note on Morphology and Syntax I. The Final -t of 弗, (*Selected Works of Peter A. Boodberg*, University of California Press, 1979) は弗 \*piuət が不 \*piuə と前置目的語之 \*ti の合音であるとの説を提示し、さらに Graham, A. C. A Probable Fusion-word: 勿 wuh = 毋 wu + 之 jy (*Bulletin of the School of Orient and African Studies, XIV Part I*, 1952) は「勿」も「毋+之」の合音であると推認した。以上「弗=不之」「勿=毋之」(以下、併合説と称する)については現在でも幾ばくかの反論はあるものの、大西克也「上古中国語の否定詞“弗”と“不”の使い分けについて」(『日本中国学会報』第40集、1988年)、魏培泉「弗」「勿」併合説新証(《中央研究院歷史語言研究所集刊》第72本第1分、2001年)などによっておおそ肯定される傾向にある。本研究においても併合説を基本的には認する。

以上は、概ね春秋戦国時代に関わる状況であるが、一方で、殷代から西周にかけての否定詞の体系についてはいまだ不明な点が多い。そもそも、甲骨・金文・『尚書』のより古い文献では併合説が成り立たないことが、呂叔湘 論毋与勿(《汉语语法论集》, 科学出版社, 1955年)や周法高 中國古代語法 稱代編(台聯國風出版社, 1972年)らによって早い段階から指摘されている。本研究では、この西周以前の否定詞体系を検討するのが主題となる。

本研究ではまず、甲骨文を調査し、殷代の否定詞について研究を進める。甲骨文には主に「不、

弗、毋、勿(弔)」「(弔)は「勿」の同語の異体字)の4種が見えるが、\*p-系声母の「不、弗」と\*m-系声母の「勿」「毋」の分用については、Takashima, Ken-ichi. Morphology of the Negatives in Oracle-Bone Inscriptions (『アジア・アフリカ語の計数研究』共同研究報告 30号、1988年)が、\*p-系の「不、弗」は占ト主体がコントロールできない事象を否定し、\*m-系の「勿」はコントロールできる事象を否定するとの説を提出しており、現在ではこれが広く受け入れられている。しかし「不」と「弗」の機能差や「毋」と「勿」の機能差についてはいまなお決着がついていない。殷代では春秋戦国時代とは異なり、「弗」や「勿」はしばしば目的語を伴い、併合説が成立しない。例えば(以下、二重の下線部は否定詞を、一重の下線部は目的語を示す)

- (1)我使弗其弔(翦)方。(『甲骨文合集』6771)  
〔我が方の武官は方国を滅ぼせないかもしれない〕  
(2)余勿伐不。(『合集』6834)  
〔私は不国を伐つまい〕

本研究ではひとまず「不」と「弗」の相違についての検証を第一の目的とし、その後「毋」と「勿(弔)」について考察をする予定である。

次に西周時代の否定詞について検討する。西周時代の資料としては、周原甲骨文と西周金文を用いる。『尚書』『毛詩』を用いないのは、後世におけるテキストの書き換えの可能性が否定できないためである。西周時代に見える否定詞としては、甲骨文同様、「不、弗、毋、勿」などがあ

- るが、併合説はやはり成立しない。例えば、  
(3)弗用茲ト。(周原甲骨 H11: 65)  
〔この占いをういかなかった〕

- (4)翦伐鄂侯馭方，勿遺壽幼。(禹鼎：『殷周金文集成』2833)  
〔鄂侯の馭方を滅ぼし、幼き者も老いたる者も残してはならない〕

西周時代の否定詞については先行研究が少なく、「不」と「弗」、「毋」と「勿」の差が不明なほか、個々の否定詞の機能についてもなお解明されているとは言い難いのが現状である。

以上に基づきに春秋戦国時代の「弗=不之」「勿=毋之」という体系が、殷周時代からどのような経過を辿り成立したのかを考察するのが本研究の大きな目的である。

さらに、秦漢時期になると、「弗=不之」「勿=毋之」という「弗」と「不」、「勿」と「毋」の対立が崩れはじめる。特に「弗」と「不」の機能的対立について、その傾向が顕著である。その結果、「弗」が「不」の強調型と認識されたり、さらには「不」が「弗」の字音を伴ったり(『広韻』『不：分勿切』。また、普通話の“不 bù”も字音としては「弗」に由来する)という現象が見られる。このほか、\*m-系声母否定詞にも変化が生じ、一部の出土資料では本来副詞であった「毋」字が、動詞「無」を表すのに用いられる。これらはいずれも春秋戦国時代とは異なる状況であり、考察の対象とすることを計画した。

以上、本研究により遂行されるいくつかの課題を通して、上古中国語否定詞の歴史的展開が明らかになることが期待される。

### 3. 研究の方法

まず甲骨文を研究材料として、殷代の否定詞体系に対する検証を行う。用いる資料は、郭沫若・中国社会科学院歴史研究所《甲骨文合集》(中華書局、1977-1982年)、中国社会科学院考古研究所《小屯南地甲骨》(中華書局、1980年-1983年)及び中国社会科学院考古研究所《殷墟花園莊東地甲骨》(雲南人民出版社、2003年)が中心となる。

最初に検証すべきは「不」と「弗」の使い分けについてである。この問題に対し Serruys, Paul L-M. Studies in the Language of the Shang Oracle Inscriptions (T'oung Pao vol.60, E.J. Brill) は「不」は自動詞を、「弗」は他動詞を否定すると見なすが、これに対し Takashima 1988 は以下の例を挙げて「不」が自動詞を否定する否定詞であるとする説を退ける(日本語訳は戸内による)。

- (5)奚不其來白馬。(『殷虛文字丙編』157 = 『合集』9177)

〔奚(人名)は白馬をもたらししていないかもしれない〕

- (6)足不其獲羌。(『殷虛文字丙編』120 = 『合集』190)

〔足(人名)は羌を捕られていないだろう〕

その上で、Takashima 1988 は「不」「弗」の分用を以下のように捉える。

bu/\*pjəg 不: stative / eventive negative (状態/現象の否定詞)

fu/\*pjət 弗: non-stative / non eventive negative (非状態/非現象の否定詞)

しかし、Takashima 氏の学説とは必ずしも適合しない例も散見される。例えば、「不」は状態動詞のほか、動作動詞(dynamic verb)とも共起する。例(5)(6)がこれにあたる。これらの例を eventive と解釈するのは難しいのではないか。

本問題に関し、本研究では以下のような視点から再解釈を試みた。

近年、上古中国語の動詞を、動詞と項(argument)の関係から、非対格動詞(unaccusative verb)と非能格動詞(unergative verb)に分類するという研究が提出されている。このうち非対格動詞とは目的語の有無で主語の意味役割が変わるもので、目的語を取らないとき主語が被動作主(patient)になり、目的語を取るとき主語が動作主(agent)又は使役者(causer)、目的語が被動作主又は被使役者(cause)になる動詞を指す。例えば、

- (7)信方斬，曰：“……。”(『史記』淮陰公列伝) : Y + 斬 = Y が斬られる

〔韓信がまさに斬られようとしているとき、言った「……」〕

- (8) 大王斬臣以徇國。(『春秋左氏伝』莊公九年): X + 斬 + Y = X が Y を斬る  
〔大王は臣下を斬り、国に従わせる〕

この分類は甲骨文の動詞にも適用できるのではないかと本研究は考えた。例えば、

- (9) 臣執。(『合集』643): Y + 執 = Y が捕らえられる

〔臣は捕らえられる〕

- (10) 其執羌。(『合集』500): (X + ) 執 + Y = (X が) Y を捕らえる

〔羌を捕らえるだろう〕

さらに、(11)のような「Y+V」構文は「不」で否定される傾向が強く、(12)の「X+V+Y」構文は「弗」で否定される傾向が強いことが、朱歧祥《殷墟卜辞句法論稿》(学生書局, 1990年)により報告されている。例えば、

- (11) 臣不其執。(『合集』643)

〔臣は捕らえられないだろう〕

- (12) 弗其執羌。(『合集』500)

〔羌を捕らえないだろう〕

以上のように、動詞の項構造とその表すところの意味、さらに否定詞の共起状況に一定の傾向が見て取れる。本研究ではこの観点から「弗」と「不」の機能差について再検討を試みる。

次に、西周時代の否定詞に着手する。用いる資料は中國社会科学院考古研究所《殷周金文集成》(中華書局, 1984-1990年)や曹璋《周原甲骨文》(世界圖書出版公司, 2002年)等である。

金文の否定詞について詳論したものは極めて少なく、管見の限り武振玉《兩周金文虚詞研究》(線装書局, 2010年)のみである。武振玉2010は「不」は客観的色彩が強く、「弗」は主観的色彩が強い、或いは「毋」は一般の否定に用いられることが多く、「勿」は禁止に用いられることが多いと解するが、いまだ未解決な部分が多い。

金文の否定詞に対する研究を終えたのち、最後に殷周時代から春秋戦国時代にかけて、否定詞の体系がなぜ「弗=不之」、「勿=毋之」という方向へ変化していったのかを考察したい。

このほか秦漢時期の否定詞体系に対する研究にも着手する。上で指摘したように、「弗=不之」、「勿=毋之」という「弗」と「不」、「勿」と「毋」の対立がこの時期に崩れていく様子が看取され、加えて、「不」が「弗」の字音を伴ったり、さらに動詞「無」を表すのに「毋」字を用いたりという、春秋戦国時代と異なる否定詞の使用状況が観察される。これら上古後期の否定詞については、楚簡(具体例は上記参照)、秦簡(《睡虎地秦墓竹簡》(文物出版社, 2001年)など)及び、漢簡(2012年以降刊行が続いている《北京大学藏西漢竹書》(壹)-(伍)(上海古籍出版社, 2012年-2016年)、《張家山漢墓竹簡: 二四七号墓》(文物出版社, 2001年)や《定州漢墓竹簡《論語》》(文物出版社, 1997年)など)を用いて比較を行いつつ考察を試みる予定である。

#### 4. 研究成果

本研究を通じて、殷代と春秋戦国時代の否定詞体系には大きな違いがあること、さらに言語の発展という観点からみれば、春秋戦国時代の体系が甲骨文の体系に先行する可能性があることを想定できる。このことは両言語が単線的な関係(同一言語の祖先と子孫の関係)にあるのではなく、春秋戦国時代の言語の祖先と殷代言語は異なる方言関係にあるということを示唆する。両言語の方言関係や伝播過程をより具体的に実証するには、今後は西周時代、特に金文の言語研究を重点的に行わねばならず、これが今後の課題である。本研究の成果は上古中国語の通時的研究や方言研究のみならず、さらに射程を広げ、シナ=チベット諸語の歴史的或いは言語類型地理的研究にも貢献しうるものである。

具体的な研究成果は以下の通りである。

##### ① 甲骨文の「不」と「弗」について

上で述べたように、甲骨文の「不」と「弗」の分布には偏りがある。特に動詞が非対格動詞の時、「不」と「弗」の分布の違いは顕著である。すなわち、甲骨文の非対格動詞が「X+V+Y」と「Y+V」という項構造をそれぞれ作る時、前者に「弗」が、後者に「不」が用いられる。

- (1)a 雀弗其得巨我。(合集 6959) 「X+弗+V+Y」

〔雀は巨(敵国)と我(敵国)を捕獲できない(=捕獲する結果に至らない)だろう〕

- b 失羌不其得。(合集 508) 「Y+不+V」

〔逃げた羌は捕獲されないだろう〕

非対格動詞の「X+V+Y」構造は直接操作による使役を表す文型であり、主語Xが目的語Yに対し強制的に何らかの変化を生じさせることを示すと考えられる。さらに変化とは動詞句の表す一連の事象(event)の結果であり、またその終結点でもあるから、このような事象と強く関連する否定詞「弗」は、動詞句が表す事態の時間軸に沿った一連の展開が終結点に至らない或いは変化が実現に至らないことを示しているのではないかと、言い換えれば、「弗」は事態の終結点の局面を焦点とした否定詞なのではないかと、本研究は考えた。一方「不」は、その点に関して中立的な、無標の一般の否定詞であると位置づけた。

なおこの仮説は、研究計画当初、本研究が想定していた結論と一部異なり、研究の途上で自説を改めたものである。以上の考察は、戸内俊介「再び甲骨文の「不」と「弗」について—使役との関りから—」(池田巧編『シナ=チベット系諸言語の文法現象2 使役の諸相』、京都大学人文科学研究所, 2019年)、戸内俊介「再議甲骨文中の否定詞“不”與“弗”的語義功能區別——兼論甲骨文的非賓格動詞」(田煒主編《文字・文獻・文明》, 上海古籍出版社, 2019年)にて論文を発表

した。

## ②金文の「不」と「弗」について

この研究成果についてはまだ論文としては刊行しておらず、その構想を「金文資料の否定詞」というタイトルで、シンポジウム「漢語史研究における動態的観点と静態的観点」(2019年9月28日、宮崎大学)にて口頭発表したのみである。

金文の「弗」は、しばしば目的語を伴うことから、春秋戦国時代の「弗」(=「不」と目的語代名詞「之」の合音)とは異なる否定機能であると予想される。例えば、

- (1) 欲女弗以乃辟陷于艱。(師匍簋：『集成』4342、西周晚期)

〔お前はお前の君を困難に陥れないようにしてほしい〕

一方で、「弗」が目的語を伴わず、「弗=不+之」と解釈できる用例も一部見られる。

- (2) 筭小子徒守，弗受。(筭小子徒簋(筭小子簋)：『集成』4036/4037、西周晚期)

〔筭小子の子は(この器を)受け継いで、授けず〕

- (3) 求乃人，乃弗得，女(汝)匡罰大。(召鼎：『集成』2838、西周中期)

〔匡よ、そなたのところに衆20人を探し出せ。そなたがもしその20人を見つけれなければ、そなたの罰は大となるぞ〕

「弗=不+之」と解釈できる用例の多くが、裁判記録や地方の諸侯の記録といった周王と直接関わりのない銘文に見られる一方、冊命金文などの周王による儀式を記した銘文にはほとんど見られない。このことから本研究では、「弗」を「不+之」として用いるのは諸侯の言語であり、一方、目的語を伴う他動詞と共起する「弗」を使うのは、周王の朝廷の言語或いは、儀式儀礼的言語であろうと推測した。さらに大西克也1988及び魏培泉2001により、「不+之」に相当する「弗」が言語的に古い形で、殷周の「弗」が新しい形式である可能性を指摘し、その上で、以下のような否定詞の変遷を想定した：殷は政治的中心地で、言語変化が速く、早くに「弗」は「不+之」型から非「不+之」型に変化し、周も儀式的な文脈では殷の言語を継承したが、周辺諸侯は古い層の言語をなお使い続けていた。周が衰退し、諸侯の力が強まると(=春秋時代以降)、古層の形式である「不+之」型が優勢になった。

## ③秦漢時代の「弗」と「不」について

この研究成果は“不”為什麼會有“弗”的讀音——論上古“不”和“弗”的演變 というタイトルで、国際学会「漢語語法化的通與變國際學術研討會・第十一屆海峽兩岸漢語語法史研討會」(台北・台湾師範大学, 2019年9月)にて口頭発表を行なった。

後漢以降のある時期に、「不」は「弗」の字音を伴うようになったことが知られているが(『広韻』「不：分勿切」。また、中国の多くの方言でも「不」は字音としては「弗」に由来する) そのような字音の獲得がなぜ行われたのかについて、これまで明確に説明したものはなかった。

「不」と「弗」(=不+之)の機能上の区別は漢代以降、徐々に曖昧になるとともに、文字表記として「不」が「弗」に取って代わる。これは一つには、多くの研究者によって指摘されているように、前漢の昭帝の名「弗」を避けるため伝世文献の「弗」が「不」に改められたことによるが、このほか古字を通用字に改める際に、僻字になりつつあった「弗」が「不」に置き換えられたこともその要因の一つと考えられる。これに加え、「訓読(義同換読)」と「イエスペルセンのサイクル(Jespersen's cycle)」が、「不」が「弗」の字音を獲得するに際し、大きな影響を及ぼしたと本研究は考えている。

「訓読(義同換読)」とは2つの文字の形や音が異なっているが、それらの字義が接近していることによって、文献中互いに訓読されたり置き換えられたりする現象を指し、例えば楚簡では「卉」字を{草}に読み、「坐」字を{跪}に読み、「滄」字を{寒}に読むといった例がある(丸括弧は文字を、{ }括弧は語或いは形態素を表す)。さらに訓読(義同換読)は、上のような読み替え現象に伴って、時に一字多音現象をもたらすことがある。「不」の文字が訓読により{弗}を表すところに用いられた結果、文字レベルにおいて、「不」字は{弗}の字音を引き継ぐ結果になったと考えられる。

Jespersen, Otto. *Negation in English and Other Languages* (København: Bianco Lunos, 1917)によると、否定表現の歴史には、もともとの否定副詞が弱まり否定を表すのに不十分であると感じられるようになると、否定副詞に何らかの付加語が加えられ音声の量を増やして強化されるという変化プロセスが見られるという。これが所謂「イエスペルセンのサイクル(Jespersen's cycle)」であるが、もし「不」にも同種の過程が想定できるとすれば、上古のある時期より「不」の発音が弱く不明瞭になり、当時の人々はその否定機能を明確にすべく、「不」を何らかの手段で強化したはずである。「不」を「弗」音で発音することこそが、この強化手段にあたると思われる。

「不」が「弗」の音を伴うようになったのは、上の2点、文字的要因と語用論的要因によるものと本研究は考えている。なお、字音の獲得が発生したのは遅くとも唐末五代、早ければ後漢にはすでに起こっていた可能性もあるが、具体的な年代はなお特定できてはいない。

「無」が「毋」と表記される現象について

前漢時代、動詞の{無}が「毋」字で表記されることが、漢簡から確認される。従来、この種の表記の交代は行政文書などの実用書に限られると考えられてきたが(大西克也論「毋」無, 《古漢語研究》1989年第4期)本研究では各種漢簡と海昏侯出土木牘『論語』を用いて、この種の表記交代は前漢初期では確かに実用書のみであったが、前漢中期には『論語』など典籍類にも侵食していたことを明らかにした。本成果は、戸内俊介「海昏侯墓出土木牘『論語』初探」(『中国出土資料研究』24号、2020年7月刊行予定)にて論文を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 なし
2. 論文標題 再議甲骨文中の否定詞“不”與“弗”的語義功能區別 兼論甲骨文的非實格動詞	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 田wei (火+韋) 主編《文字・文獻・文明》	6. 最初と最後の頁 11-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内俊介	4. 巻 24
2. 論文標題 海昏侯墓出土木牘『論語』初探	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国出土資料学会編『中国出土資料研究』	6. 最初と最後の頁 2-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内 俊介	4. 巻 2
2. 論文標題 再び甲骨文の「不」と「弗」について 使役との関わりから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 池田巧編『シナ=チベット系諸言語の文法現象2: 使役句の構造』	6. 最初と最後の頁 pp.219-238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸内 俊介	4. 巻 98
2. 論文標題 甲骨文の非対格動詞から見る「不」と「弗」の否定機能差異	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学東洋文化研究所編『東洋文化』	6. 最初と最後の頁 65-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸内 俊介	4. 巻 7
2. 論文標題 漢語と外来語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐藤進・小方伴子編『講座 近代日本と漢学 第7巻 漢学と日本語』	6. 最初と最後の頁 24-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 地下から出た『論語』 出土資料から『論語』の原形を探る
3. 学会等名 『論語』の学校（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 “不”為什麼會有“弗”的讀音 論上中古“不”和“弗”的演變
3. 学会等名 漢語語法化的通與變國際學術研討會・第十一屆海峽兩岸漢語語法史研討會（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 金文資料における否定詞
3. 学会等名 シンポジウム「漢語史研究における動態的觀點と静態的觀點」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内俊介（評者：村上幸造）
2. 発表標題 阪哲評書：戸内俊介『先秦の機能語の史的発展 上古中国語文法化研究序説』（研文出版、2018）
3. 学会等名 阪神中哲談話会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸内 俊介
2. 発表標題 再議甲骨文中の否定詞“不”與“弗”の語義功能區別—兼論甲骨文的非賓格動詞
3. 学会等名 文字、文獻與文明 第七屆出土文獻青年學者論壇暨國際學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸内 俊介
2. 発表標題 出土文献から見る上古中国語の“文法化”について
3. 学会等名 東方学会東洋学・アジア研究連絡協議会シンポジウム「近未来の東洋学・アジア研究 言葉の重みを受けとめ、いかにその壁を超えるか」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸内 俊介
2. 発表標題 出土文字資料に見える古代中国語文法の変遷 「其」を中心に
3. 学会等名 漢字学研究会シンポジウム「中国古文字学研究の最前線」（招待講演）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 戸内 俊介
2. 発表標題 論甲骨文中の否定詞“不”與“弗”的語義功能區別
3. 学会等名 9th International Symposium on Ancient Chinese Grammar(第九屆國際古漢語語法研討會)(國際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 戸内俊介
2. 発表標題 現代中国語シリーズ 名詞?動詞? 古代中国語品詞分類の難しさ
3. 学会等名 立命館大学孔子学院中国理解講座講演会(招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 戸内 俊介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 227
3. 書名 先秦の機能語の史的発展 上古中国語文法化研究序説	

1. 著者名 二松学舎大学文学部中国文学科	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 改訂新版 中国学入門 中国古典を学ぶための13章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2019年12月、戸内俊介『先秦の機能語の史的発展 上古中国語文化研究序説』(研文出版、2018年)により、第47回金田一京助博士記念賞を受賞。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----